

「浮世に呵え」  
わら

田窪  
泉

あらずじ

江戸時代後期。ひよっこ絵師の孫八（18）は頭を抱えていた。今、江戸では美人画ブーム。美人画を描けなければブレイクは無い。しかし孫八は、がさつな姉にバカにされながら育った為、良い女がわからず、美人画が苦手だった。

ある日、孫八は買ったばかりの錦絵を大通りでぶちまけ、困っているところを助けてくれた、たおやかな美人に心奪われる。彼女にもう一度会えば、完璧な美人画を描けると確信した孫八だったが、再び彼女に出会ったのは芝居小屋。彼女は女ではなく、上方出身で駆け出しの女方、中岡菊太郎（16）だった。男だも知っても、舞台上の美しい菊太郎に釘付けになった孫八は、菊太郎に美人画のモデルを頼む。自分が知っているどんな女性より美しく、たおやかで、更に自分の武者絵を好きだと言ってくれる菊太郎に心惹かれる孫八。役者は身分が低く、特に下っ端の役者は蔑まれることが多かったが、自分を見下したりしない孫八に菊太郎も好感を抱く。菊太郎と過ごすにつれ、恋心が募る孫八は、鼻屑にしてくれる客に乞われれば床を共にしなければいけない菊太郎の事情を知り、菊太郎が客のもとに行くのを阻む。自分の居場所は江戸の舞台にしかないと告げる菊太郎は、孫八の手を振りほどいて客のもとに行ってしまう。傷心の孫八は、長屋の前で富士山を見たいと駄々をこねる寝たきりの老婆、イネに遭遇。孫八はイネの家の戸に富士山の絵を描く。それを見たイネは感動して立ち上がり、手を合わせる。その姿を見た孫八は、それ以来、絵の鍛錬に没頭する。孫八の恋の事情を知る先輩絵師・喜楽（20）は、前を向いた孫八を励ますように、版元が清国の軍記物の挿絵を描く絵師を探しているという情報を提供。軍記物はヒットし、孫八は晴れて独り立ちする。

一方、世間は將軍家の贅沢と飢饉により不況に陥っていた。

打開策として儉約令が出され、娯楽は禁止に。特に役者は目の敵にされる。それを知った孫八は、菊太郎を案じて町はずれに移転させられた芝居小屋に行く途中、嫌がらせを受ける役者を助ける。それは菊太郎だった。孫八は、どんな状況でも凜として前を向く。菊太郎への想いを再確認する。菊太郎は、決して人を蔑まない、まっすぐな孫八の気持ちを受け入れ、2人は結ばれる。再会を約束し、芝居小屋に帰っていく菊太郎だったが、人気急上昇中の菊太郎は、儉約令の一環で上方に戻される。努力しても虐げられる菊太郎の現状がある一方、大奥の贅沢なさまを目の当たりにした孫八の怒りは頂点に達した。しかし、孫八にできることは限られている。一考した孫八は、清国の軍記物になぞらえた風刺画を描き、売り出す。風刺画は爆発的に売れ、孫八は裁きにかけられる。奉行の前で申開きする孫八だったが、奉行は絵で納得させる、さもなくば版元、師匠もろとも処罰する、と孫八に詰め寄る。孫八は菊太郎を想い、発禁である美人画を描いて披露。それを見た奉行たちはあまりの美しさに感嘆の声を漏らす。奉行はそれが菊太郎であると見抜く。奉行は芝居びいきで、孫八と奉行は以前、芝居小屋で知らぬうちに出会っていた。奉行は奉行で、芝居を守るために画策していたことを知る孫八。それぞれに思いがあり、自分の信じた道を歩んでいることを理解した孫八は、放免される。

3年後、老中は失脚し、儉約令がなくなった江戸。そこには、上方で名をあげた菊太郎が立女形として戻って来ていた。一大興行に向け、錦絵を制作する為、当代随一と称される絵師と対面する菊太郎。菊太郎の前に姿を現したのは、華川楽生を襲名した、孫八だった。

(了)

孫八（18〜22）ひよっこ絵師

中岡菊太郎（16〜20）かけだしの女方

華川喜楽（20）絵師・孫八と兄弟弟子

華川楽生（39）ベテラン絵師・孫八の師匠

仙北屋吉兵衛（44）錦絵の版元

遠山景元（47）北町奉行

与一（26）長屋の住人・大工

イネ（50）長屋の住人・与一の母親

トミ（22）長屋の住人・与一の妻

いと（19）孫八の姉

きぬ（20）孫八の姉

ヤス（30）失業者

ロク（26）失業者

読売屋（28）、奥役（26）、座元（45）、同心（38）、絵草

紙屋店主（38）、男1（25）、男2（28）、弟子（19）

僧、岡っ引き、醤油屋の若旦那、与力、摺師

○華川楽生の屋敷・孫八の部屋・中（朝）

六畳の部屋。孫八（18）の真剣な顔アップ。一心不乱に筆を走らせている。孫八は総髪、半纏はんでん、腹掛けももひきに股引ももひきという職人スタイル。絵は見えない。孫八、脱力して仰向けに倒れ込み、情けない顔で天井を見上げる。

孫八「ダメだ」

楽生の声「孫八、準備できたのか!! 版元さんがいらっしやるぞ」

孫八「いけね! すいやせん、すぐ行きやす!」

○同・広間

たくさんの錦絵が広げられ、仙北屋吉兵衛（44）がひとつひとつを注意深く眺めている。仙北屋の隣に華川楽生（39）がついている。錦絵の周りには、楽生の弟子達が緊張した面持ちで座っている。孫八もその中にいる。

仙北屋「ほう、さすがは今をときめく楽生師匠のお弟子さん達だ。粒ぞろいすな」

一枚の武者絵の前で仙北屋が立ち止まる。その横には孫八が座っている。

仙北屋「この武者絵はお前さんが？」

孫八「へ、へえ! 一ノ谷の戦いの源義経にございやす」

仙北屋「ほう、これは見事だ。美人画はあるかい？」

孫八、眉間にしわを寄せ、固まる。

楽生「孫八、ねえのか？」

孫八、そろそろと武者絵をよけるとその下に美人画が出てくる。仙北屋、しげしげと孫八の美人画を眺める。

仙北屋「腕は確かなようだ」

孫八、パツと明るい表情で顔を上げる。

仙北屋「だが、お前さんの描く女には色気というものがないね。」

今、店の売れ筋は美人画なんだよ。これではねえ」

仙北屋、歩き出し孫八から離れる。一枚の美人画の前で仙北屋が止まる。それは湯上がりの女の、艶めかしい美人画。その隣には喜楽（20）が座している。

仙北屋「これはまた、なんとも艶っぽいねえ。お前さん、名は？」

喜楽「華川喜楽にごぜえやす」

仙北屋「（ニヤニヤしながら）若造が、何人泣かせた？」

喜楽「へ？」

仙北屋「よっぽど女を知らなきゃこの色気はだせないだろうよ」

喜楽「（まんざらでもなさそうに）そんな、めっそうもねえ」

仙北屋「（高笑いして）今回はこの喜楽さんに元絵を頼もうかね」

喜楽「ありがとうごぜえやす！」

仙北屋「飛ぶように売れる美人画を期待してるよ」

喜楽「（深々と頭を下げ）へへーっ」

仙北屋「皆も売れる絵を頼むよ。売れそうなものならすぐ錦絵にして店頭に並べてあげるからね」

孫八、自分の美人画を見てため息をつく。

### ○絵草紙屋・中

壁面にはたくさんの美人画が貼ってある。一段上がったところに店主（38）がいて帳簿をつけている。孫八がゆつくりと錦絵を見定める

店主「良い絵でござんしょう。どうです、一枚」

孫八「武者絵は、ねえんですかい？」

店主「ありますとも、こちらに」

店主、店の隅を指し示す。そこには美人画しかない。

店主「あれ？ 確か、ここに」

店主が美人画を横によけると武者絵が出てくる。

店主「ほら、あった」

孫八、ため息をつき、くるりと背を向ける。

店主「なんだい、買わないのかい」

孫八、陳列されている美人画を何枚もつかみとる。

孫八「これだけくれ」

店主「枚数に驚きながら」ま、毎度あり」

○大通り

たくさんの人が行き交っている。浮かない顔の孫八が、懐から孫八が描いた武者絵を取り出し、眺めながら歩いている。買った美人画は丸めて小脇に挟んでいる。

孫八「おいらが描いた武者絵の方が断然良いできじゃねえか」

孫八、購入した美人画を小脇から取り出し、眺める。

仙北屋の声「よっぽど女を知らなきゃこの色気はだせないだろう

よ

孫八「浮かない顔で」女、ね」

いとの声「孫八い——！」

孫八、顔面蒼白で辺りをきよろきよろと見回す。前方から、前掛けをした、いと（19）が走ってくるのが見える。

孫八、くるりと向きを変え、血相を変えて全速力で走り出す。いと、大きく息を吸い込む。

いと「誰かーっ、その男をつかまえてえ！」

往來の人々が声に驚き、孫八に注目する。孫八、いともとに駆け寄り口を塞ぐ。

孫八「往來の人々に向かつて）へへ、お騒がせしてすいやせん。

姉ちゃんですんで。おいらは弟」

いと、孫八の胸ぐらをつかんで殴り飛ばす。

いと「姉上様が呼びかけてんのに何逃げてんだ、このとんちき！」

孫八「訳わかんねえままこうやって殴るからだよ！」

いと「孫八、いつになったら私たちを美人画にしてくれるのさ」

孫八「へ？」

いと「おつかさんも、おきぬ姉ちゃんも待ってんだよ!!」

孫八「あのな、おいと姉ちゃん、下っ端なんだから錦絵の元絵はまだ任せてもらえねえし、おいらは武者絵が」

いと「あんた楽生師匠に弟子入りするとき何て言った？ おいらは皆の心をつかむ一流の絵師になる、とかなんとか大口叩いてたんじゃないのかいっ」

孫八「だからそうなるように今頑張って」

いと「つべこべ言わずにとつと一流の絵師になって私達を」

孫八「おいら、早く戻んねえと師匠にどやされっから」

孫八、一目散に駆け出し、角を曲がる。

孫八「いい女なんかどこにいるんでーいっ」

人をかき分け走り続ける孫八。前方から早足で歩いてくる男1が孫八にぶつかる。孫八は持っていた美人画と武者絵を往来にぶちまけてしまう。

孫八「あーっ、おいらの錦絵が」

男1はそのまま足早に去る。錦絵は通行人に踏み荒らされる。孫八、半泣きで美人画を拾い集める。通行人はうつとうしそうな顔をする者もいれば、舌打ちするものもある。孫八、拾い集めた美人画の枚数を数えている。

孫八「一枚足りねえ」

孫八、半泣きできよろきよろ辺りを見回していると、背中を叩かれる。それは振り袖を身に纏い、羽織を羽織った中岡菊太郎（16）である。菊太郎は非常に美しい。

菊太郎「兄さん、これをお探しじゃござんせんか？」

孫八、振り向き美人画を受け取る。美人画しか見ていない。

孫八「うおーっ、ありがてえ！ そうそう、これをさがして…」

孫八、顔を上げ、菊太郎に見とれて固まる。

菊太郎「(ニッコリと) ようござんした」

菊太郎、孫八に背を向け、歩き出そうとする。

孫八「あ、あ、あの」

菊太郎「(振り向いて) へえ」

いとの声「孫八ーっ、まだ話は済んでないよっ」

孫八「いけねえ！」

孫八、駆け出し、すぐ角を右に曲がりかける。曲がり際、名残惜しそうに菊太郎を見つめて走り去る。菊太郎、呆気にとられているが、ふと、道の端に落ちている武者絵に気づき、それを拾い上げる。

○楽生の屋敷・広間(夜)

楽生を上座に、孫八、喜楽含む8人の弟子達が賑やかに宴席を設けている。楽生の隣には喜楽が座している。とてもうれしそう。孫八はボーツとしていて上の空。

喜楽「(楽生に) 師匠、この度はありがとうございますぞえやした」

楽生「喜んでばかりじゃいけないよ。お前の錦絵が売れなかったら声はかからなくなるんだ。しっかり気を引き締めて、良い美人画を描くんだよ」

喜楽「へえ！」

楽生「孫八、お前、美人画を描けなきゃ売れっ子にはなれないってあれほど…、聞いているのか孫八！」

孫八「(飛び上がって驚いて) へ、へえ！」

喜楽「師匠、孫に美人画は無理ですぜ。(小指を立てて) からっきしなんすから」

楽生「この前の夜、賑やかに繰り出したんじゃないのかい」

喜楽「吉原にでも行ければ良いんでしょうけど、（人差し指と親指で輪っかを作り）これがねえですから。孫の奴、ものすげえ年増の夜鷹に強引に茂みに連れこまれて」

楽生「連れ込まれて？」

喜楽「（笑い出す）ドへたくそって説教されて金巻き上げられた挙句、次の日には痒い痒いって七転八倒でさあ」

弟子達、爆笑。楽生、眉間をおさえて頭を振り、孫八に目をやる。孫八、へらへらし出す。

楽生「孫八、どうしたんだい。何か悪いものでも食ったか」

孫八「師匠、おいら、とうとう会えたんです」

楽生「誰に」

孫八「えくと、誰でしょうかね」

喜楽「ダメだ。版元さんに美人画がダメだって言われたのがよっぽどこたえちまつてるんだな。孫、ちよつと休め」

孫八「ちげえやすよ。おいら、すげえ美人画、描けそうな気がするんでさあ」

孫八、広間を飛び出していく。楽生、喜楽と弟子達が顔を見合わせていると、筆と紙を持って孫八が戻ってくる。

孫八、紙を広げてさらさらと女の絵を描く。楽生と喜楽ら弟子達は孫八を取り囲み、その様子を見つめている。

喜楽「良い！ 孫、今までの中で一番良いんじゃないか？」

弟子達も、口々に孫八の美人画を褒める。楽生は押し黙ってその絵を見つめている。孫八、絵を握りつぶす。

孫八「ダメだ。あの人はこんなもんじゃねえんだ。ちきしよう、全然ダメだ」

楽生「じゃ、描きまくるしかないね」

孫八「師匠」

楽生「お前が納得いかないものを版元さんが、お客さんが納得す

るわけがない。納得いくものが描けるまで描くしかないだろ」

孫八「へえ！」

孫八、紙と筆を持って広間を飛び出していく。

○同・孫八の部屋（夜→朝）

月の光が差し込んでいます。孫八が走り込んできて一心不乱に絵を描き始める。

×

×

×

丸められたたくさん紙の真ん中で孫八が仰向けになって寝転んでいます。部屋に朝日が差し込んでくる。

孫八「ダメだ」

○樂生の屋敷・縁側（夕）

孫八が暗い顔で腰掛けている。背後から喜樂がやって来て孫八の頭をはたく。

喜樂「何暗い顔してやがるんだよう」

孫八「描けねえんです。あの人にもういつペン会ったら描けるか

もしれねえけど、どこに行きや会えるんだか」

喜樂「他の女じゃダメなのか」

孫八「あの人だけなんでさあ。良い女だなんて思った女は。（た

め息ついて）美人画、描かなきゃダメですかねえ」

喜樂「くれえ顔すんなよ。明日芝居観て、気晴らししようや」

孫八「芝居？」

喜樂「師匠が芝居絵や役者絵の向上の為に観に行つとけつていつてただろうが」

孫八「あ、そうだったそうだった」

喜樂「もしかしたらその女が来てるかもしれねえぞ」

孫八「おおっ、昂ぶってきましたぜっ」

○芝居小屋・月山座・中（朝）

平土間、左右上棧敷・下棧敷にも満員の観客。大向の枱席でぎゆうぎゆうになって座っている孫八と喜楽。孫八はきよろきよろしている。

喜楽「どうでい、いたか？ その良い女」

孫八「居やせん…。今んところ」

きのねが鳴り響き、客が舞台に集中する。幕が開き鳴り物が響く。孫八は腰を浮かせてきよろきよろしている。

喜楽「おい、孫、あんまり動くなよ」

孫八の後ろに座っている遠山景元（46）が眉間に皺を寄せる。

遠山「なんだよお前、きよろきよろしやがって。気が散るんだよ。芝居観やがれ」

孫八、頭を下げ、ぱつが悪そうに前を観ると、あでやかな女方が4人で舞っている。その中に菊太郎がいる。孫八、首をかしげてしばらく菊太郎を観ている。

× × ×  
（フラッシュユ）

孫八を上目遣いで見つめ、微笑む菊太郎。

× × ×  
孫八、立ち上がる。

孫八「見つけた！」

喜楽「おいっ、孫！」

孫八「姐ねえさん！ おいら、ずっとあんたを探してたんだ！」  
菊太郎が舞いながら、一瞬孫八の方を見る。

遠山「何立ち上がってんだ！ 見えねえだろうがこのすつとことどっこいが！」

遠山、孫八を蹴り飛ばす。喜楽、孫八を抱き起こし、遠山

をにらみ返すが、遠山の鬼の形相と、腕まくりした遠山の腕に入れ墨を認め、気圧される。遠山、孫八の鼻先まで顔を近づけすこむ。

遠山「俺あ、芝居見物を邪魔されるのが一番我慢ならねえんだ。今度邪魔しやがったらただじゃおかねえからな！」

喜楽「勘弁してやってくださいよ、旦那。こいつにはよく言って聞かせやすんで」

遠山、舌打ちして座る。

喜楽「(小声で孫八に) 大人しくしてろ、このこんこんちき！」

孫八、押さえ込まれながらも舞台上の菊太郎を潤んだ目で見つめている。美しく舞う菊太郎。華やかな舞台。

× × ×  
雷鳴のような歓喜の声。きのねとともに幕が閉じる。

喜楽「いい女じゃなくて男じゃねえかよ」

孫八、目を潤ませたまま放心状態である。客が談笑したり、立ち上がったたりし始める。

孫八「おいら、やっぱりあの人を描きてえ！」

孫八、観客の間を猛ダッシュですり抜けていく。

○同・同・通路

役者達が控え室に戻りかけている。その中に菊太郎もいる。菊太郎に向かって血走った目の孫八が突進してくる。

孫八「姐ねえさん！ おめえさんの絵を描かせてくれえーっ！」

菊太郎「え」

孫八「おいら絵師なんだ。でも美人画がかけなくて。でもおめえさんなら描けそうな気がするんだ！」

孫八、奥役(26)に羽交い締めにされる。

奥役「お客さん、困りやすよ」

奥役に引きずられていく孫八。

○同・同・外

芝居小屋の外観。たくさんの人が行き交っている。芝居小屋の入り口から奥役に襟首をつかまれた孫八が出てきて放り出される。

奥役「つたく、のぼせ上がってんじゃねえぞ。帰れ小僧<sup>けえれ</sup>」

奥役、孫八を威嚇し、小屋に戻っていく。孫八、よろよると立ち上がり、しばし芝居小屋を見上げているが、うつむき、芝居小屋を背にする。と、孫八、袖を引っ張られる。それは衣装を脱いで羽織をかけ、手ぬぐいを頭にかけた菊太郎である。

孫八「ね、ね、姐さん！」

菊太郎、口到人差し指をあてる。

菊太郎「こっち」

菊太郎、孫八を芝居小屋の裏手に引っ張っていく。

○同・裏・川岸・柳の木の下

目を白黒させた孫八と、菊太郎が向かい合っている。

孫八「姐さん！ おいら」

菊太郎「中岡菊太郎。うちの名前。兄さんは？」

孫八「(紅潮して) 孫八っていいやす」

菊太郎「うちの絵を描きたいって言わはった？」

孫八「(頷いて) おいら、華川楽生師匠の弟子で」

菊太郎「楽生て、あの売れっ子絵師の？」

孫八「つつてもまだひよっこです。今売れてる錦絵は美人画だから、美人画はすげえのが描けなきやいけねえんだけども、

おいら、どうも苦手で」

菊太郎「そうですか。けど、うちは武者絵の方が好きやけどね」

菊太郎、懐から錦絵を取り出す。

菊太郎「孫八さんが落としていきはったこの武者絵、義経でっしやる。男らしゅうて粋で。熱い息づかいまで聞こえてきそうやわ。うちこの錦絵、ごつつ気に入ったから…」

孫八、両手で菊太郎の肩をつかむ。

孫八「ほ、ほんとにそう思いやすか？」

菊太郎「へ、へえ」

孫八、感極まって菊太郎を抱きしめてしまう。

孫八「ありがとうござえやすー！」

我に返った孫八は素早く菊太郎から体を離し、謝り倒す。

孫八「申し訳ねえ、つい。申し訳ねえ！」

孫八、叫びながら走り去る。

#### ○芝居茶屋・前(朝)

芝居茶屋・外観。僧と、僧に寄り添う菊太郎が出てくる。

菊太郎は振り袖を着、羽織を羽織っているが少し着崩れ、髪は乱れている。僧は菊太郎の顎をなでた後、芝居茶屋をあとにする。菊太郎、笑顔で僧を見送る。僧が見えなくなるのとサツと笑顔を消し、大あくびをする。そこに背後の芝居小屋を気にしている孫八が通りかかる。孫八と菊太郎、目が合う。

菊太郎「おや？」

孫八「き、き、菊太郎さん！ き、昨日は申し訳ねえ事を」

孫八、頭を下げる。菊太郎、驚いた顔で止まっている。

孫八「おいら、何かおかしな事言ったかい？」

菊太郎「うちら役者は卑しい身分や。怒鳴ってくる人は数知れんけど、謝ってくる人なんておらんもん。そんな人、うち初め

て会うたわ（微笑む）<sup>お</sup>

孫八「腰抜けなだけでやす。姉ちゃん達がいつもそう言って…」

菊太郎「（首を振って）うちらを見下したりせん、優しいお人や」

孫八「（熱っぽく）おめえさんのこと、描かせてくれねえかい？

すげえ錦絵にして、絵草紙屋で売り出してやりやす」

菊太郎「え」

孫八「版元さんは、売れるとみた絵ならすぐに錦絵にして店頭  
に並べてくれるっておっしゃてやした。菊太郎さんの錦絵なら

絶対売れる」

菊太郎「うちが、錦絵」

菊太郎、うれしそうに微笑む。孫八、その笑顔を見てにやける。

○楽生の屋敷・広間

喜楽、弟子達が絵を描いたり、楽生に絵を見せたりしている。孫八も絵を描いているが、外を見てそわそわしだす。

楽生「皆、そろそろ片付けな」

孫八、勢いよく立ち上がり楽生のそばに駆け寄る。

孫八「師匠、ちよつと出てきてもかまいやせんか？」

楽生「仕事は終わったから構わないが」

孫八「ありがとうございます！」

孫八、そう言うなり道具を持って飛び出していく。

○芝居小屋・月山座・裏・川原・柳の下（夕）

菊太郎が羽織を羽織って柳に寄りかかっている。その前に孫八が座って、真剣な目で菊太郎を見つめ、絵筆を走らせている。

孫八「きれいだ」

菊太郎「え」

孫八「あ、いや、その、どっからどう見ても女子おなじにしか見えねえ  
なと思いやして」

菊太郎「女方をやるんやったら、日頃から女でないとあきまへん。  
せやないとふとした拍子に男が出てまう。お客さんを興ざめ  
させたらおしまいやから」

孫八「見上げた心意気でやすね」

菊太郎「て、うちの師匠が。きれいやった。うちも師匠みたいに  
なりたいて、こんまいころからずっと思うてました」

孫八「菊太郎さんはなんだってわざわざ上方からこの江戸に？」

菊太郎「上方にはすごい女方がぎょうさんおって、うちや、ちい  
とも舞台上上げてもらえんかった。そんな時、たまたま江戸  
から来てはった座元さんに、江戸に来たらすぐ舞台上上げた  
る、言われて。京みやこから来た女方は売りになる、て」

孫八「どうでやすか？ 江戸は」

菊太郎「うちを舞台上居させてくれる、どこよりも良ええ町です」

菊太郎、笑顔で空を見上げる。

× × ×  
(フラッシュユ)

× × ×  
たくさんの観客の笑顔。

菊太郎「舞台上うちは違う人間になるんです。ぎょうさんのお客  
さんがうちを観て、泣いたり笑ったり。舞台が跳ねた後の喝  
采を聞くと、ああ、もう死んでもええなあって思てまう」

孫八「死んじや、ダメですぜ！」

菊太郎「笑って」ものの例えや。立女形になるまでは死ねまへ  
んよ。孫八さんはなんで絵師に？」

孫八「(ばつが悪そうに) 出来の良い兄あにさん達や、俺をバカにす

る姉ちゃん達に勝てるもんがこれしかなかったから。菊太郎  
さんからすりゃ、ケチな理由でやすよね」

菊太郎「いいえ。誰にも負けへん武器を持ってはるって事やもん。  
そんなお人は、絵師にならなあかんと思います」

孫八、赤面して菊太郎を見つめている。遠くで鐘がなる。

菊太郎「すんまへん、孫八さん。うち、もう行かん」と

孫八「あの！ もう少し描き足したいんで、明日もお願いできや  
せんか？」

菊太郎「(ニツコリと)へえ」

菊太郎、孫八のそばにしゃがみ、絵をのぞき込む。孫八、  
素早く絵を隠す。

孫八「か、完成してから見てくだせえ」

菊太郎「孫八さん、いけずやわあ。ちよつとだけよろしいやんか」  
菊太郎、孫八が胸に押しあてていた絵を取ろうと勢いよく  
腕を伸ばす。孫八が絵を後ろに隠したので、菊太郎、孫  
八に抱きつく格好になる。見つめ合う菊太郎と孫八。

孫八「(赤面して)すいやせん！ あの、また明日お願いしやす」  
孫八、素早く道具を拾い集め、よたよたと走って行く。

○楽生の屋敷・縁側(夜)

喜楽が廊下を歩いてくる。その先に孫八が座っている。弟  
子達が孫八を取り囲んでいる。

喜楽「どうしたんでい」

弟子「孫八が、帰ってきてからちつとも動かねえんでさ」

喜楽、孫八のそばに寄り、振り向かせる。孫八は目だけ上  
を見たまま半笑いで固まっている。喜楽、恐れおののき、  
孫八を激しく揺する。

喜楽「どうした孫八！ 美人画は描けたのか!!」

孫八、何度か首をかくがくされた後、目の焦点が合う。

孫八「美・じ・ん・画…」

喜楽「そうだ、美人画だ」

孫八「そんなもん、一生描けなけりやいいんで〜い」

喜楽「はあ!! 何言ってるんだ、このバカ! しっかりしやがれ」

喜楽、孫八の頭を思いつきりはたく。

弟子「喜楽兄さん、こ、これは」

喜楽「恋煩わづれえだ」

弟子「恋煩え…」

喜楽「相手は、(孫八の耳元で) 女方？」

孫八「うひひひひひ」

喜楽、孫八の隣に腰掛ける。

喜楽「孫、おめえの手には負えねえって。やめとけ」

孫八「どういう意味です？」

喜楽「おめえ、下っ端役者は鼻肩の客に乞われれば床入りするの、知ってるか」

孫八「え」

喜楽「上に行きたきや避けては通れねえんだよ。相手が男だろうが女だろうがな。おめえ、平気か？」

孫八「そ、そ、そんな事」

喜楽「遊女なら金を積めば身請けできるが、役者は借金の形に客と寝る訳じゃねえからな。おめえには土台無理な相手…」

孫八、叫び声をあげて喜楽に殴りかかる。

喜楽「なんだこの野郎! のぼせ上んな!」

取っ組み合いの喧嘩をする孫八と喜楽。囃し立てる弟子達。

○芝居小屋・月山座・裏・河原・柳の下(夕)

菊太郎が戸惑った表情で柳にもたれかかっている。その向

かいで孫八が、アザだらけの顔で筆を走らせている。

菊太郎「孫さん、あの、大丈夫？」

孫八「へえ。ちよつと兄弟弟子とやり合っちゃまって。何てことありやせん。火事と喧嘩は江戸の華って言いやすから」

菊太郎「孫さん、今日はお座敷に呼ばれてるからちよつと早めに」

孫八、血相を変えて筆を置き、菊太郎の腕をつかむ。

孫八「行かねえでくれ」

菊太郎「え」

孫八「行つて欲しくねえんだ」

驚いた顔の菊太郎、悲しげにうつむく。が、決意した表情で顔を上げると、孫八の手をゆつくりふりほどく。

菊太郎「それはできまへん」

孫八、苦しそうな表情で菊太郎を見つめる。

菊太郎「畳屑にしてくださいるお客さんを大事にせんと、舞台には上がられへん」

孫八「それは」

菊太郎「舞台だけが、うちの生きる場所なんです」

孫八「でもよ！」

菊太郎「うち、行きますんで」

孫八「(意を決したように) おいら！ 菊太郎さんの事が」

菊太郎、孫八の口をそつと手でふさぎ、ゆつくり首を振る。

孫八、悲しそうな目で、口にあてられた菊太郎の手に、

そつと自分の手を重ねる。菊太郎、するりと孫八の手を

すり抜けて小走りで走り去る。孫八、うつむいたままそ

の場に立ち尽くす。

孫八「言わせても、くれねえんですかい」

○楽生の屋敷・廊下(夜)

真つ暗闇の中、喜楽が歩いてくる。

喜楽「うい、遅くなっちゃったぜ」

喜楽、つまずいて派手に転ぶ。

喜楽「いって、なんでこんなところに荷物か」

喜楽、目をこらすと孫八が丸くなって転がっており、周りには破かれた菊太郎の絵が散乱している。

喜楽「孫！ 何やってんだおめえ」

孫八「喜楽さんの言う通りでした」

喜楽「ああ？」

孫八「おいらには無理だ」

喜楽「だから言っただろうがよ！ おめえに女方は…」

喜楽、孫八の襟首をつかみ顔をつきあわせる。孫八は涙ぐんでいる。

喜楽「吉原行くか」

孫八「金がねえです」

喜楽「元絵の金が入ったのよ。今日はこの喜楽様のおごりだ」

孫八「また説教されたら立ち直れねえんでやめときます」

喜楽「でえじようぶだから。吉原の女はそんなことねえって、多分。とにかく行くぞ」

○道・長屋・与一の家の前（夜）

上機嫌の喜楽に腕を引つ張られた、暗い顔の孫八が歩いてくる。与一の家からイネ（50）が這いずり出てくる。続いてトミ（22）が出てきて、トミがイネの腕を取り、家に引き入れようとする。

トミ「おつかさん、うちに入っておくんないよ」

イネ「離せ！ わしや富士のお山が見たいんだ」

トミ「そんな無理言わないでくださいよ」

与一の声「おトミ、もうほっとけよ！」

イネ「毎日毎日床に伏せて。どうせ死ぬんだ。最後に富士を拝みたいと思つて何が悪い！」

喜楽、イネのそばにしゃがみ込む。

喜楽「ばあさん、嫁さん困らすんじゃねえよ」

イネ「うるさい！ 赤の他人はすっこんでろ」

トミ、おろおろしている。孫八、何か思いついたように開け放たれた与一の家の中に駆け込んでいく。

孫八の声「これ、ちよいとお借りしやす」

孫八、墨と筆を持って戻つてくると、もの凄いスピードで入り口の戸、全面に富士山を描き始める。トミとイネ、その様子をポカンと見つめている。絵を描き終えて振り返る孫八。

孫八「気に入らなけりや張り替えに来やすんで」

イネ、月明かりに照らされた雄大な富士山の絵を凝視し、立ち上がる。トミ、息を吞んでその様子を見ている。

イネ「ゆっくり手を合わせながら」ありがてえ。ありがてえ」

トミ「あんた！ おつかさんが、おつかさんが立ってる！」

与一（26）、家から飛び出してくる。

与一「おつかさんが!!」

与一とトミが驚いた顔でイネを見つめる。

イネ「与一、おトミ、よくご覧。ありがてえ富士のお山だよ」

トミ、うなずきながら泣いている。

与一「ああ、きれいだな」

その様子を見つめている喜楽と孫八。孫八、泣きそうな顔で微笑み、叫びながら元来た道を駆け出していく。

喜楽「孫く、吉原、そっちじゃねえぞく」

○楽生の屋敷・広間（昼〜夜）

孫八や他の弟子達が絵を描いている。楽生が上座に立ち、手をたたく。弟子達は伸びをしたり、肩を叩いたりしながら道具を片付け始める。孫八は絵を描き続けている。

×

×

×

楽生が廊下から広間の中をのぞく。部屋は薄暗い。中ではまだ孫八が真剣な表情で絵を描いている。孫八の周りにはたくさんの描き上がった絵が広げられている。

○摺師の作業場

畳の上に摺師が座っている。その周りには仙北屋、楽生、孫八がいる。摺師は、作業台の上の版木に刷毛で素早く青い色の染料を塗り広げる。そしてそこに和紙を重ねると、見事な早さで紙の上で馬車を動かす。ひらりと紙をはがし、それを楽生に見せる。楽生と仙北屋、絵を見てもうなずき合い、摺師にもうなずく。孫八、その様子を熱心に見つめ、メモして（紙に書き留めて）いる。

○楽生の屋敷・孫八の部屋（夕）

孫八が文机に西洋画を置き、参考にしながら絵を描いている。それは色鮮やかな美人画である。

×

×

×

（フラッシュユ）

菊太郎が柳に寄りかかって微笑んでいる。

×

×

×

孫八、頭をふり、絵を握りつぶす。

○そば屋・中（夕）

長いすに喜楽と孫八が座ってそばを食べている。

喜楽 「近頃、熱が入<sup>へ</sup>ってるそうじゃねえか。師匠が感心してたぞ」

孫八 「喜楽さんには負けやすよ。独り立ちして、今や売れっ子絵師の仲間入りじゃねえですかい」

喜楽 「女が寄ってきて寄ってきてしょうがねえや。おめえはどう

でい、(小指を孫八に突きつけて) こっちの方はよう」

孫八 「今そんな気分じゃねえですよ」

喜楽 「おめえ、まさかまだ女方と」

孫八 「会ってやせん。次の約束はしなかったですしね」

喜楽 「芝居小屋にも行ってねえのか？」

孫八 「へえ。おいら菊太郎さんに、錦絵にして絵草紙屋で並べてやるからって言って絵を描かせてもらってたんです」

喜楽 「錦絵？ 女方、名題役者だっけか？」

孫八 「首をふって) 錦絵にして良い役者ってのは、役者の中でも上から二段目までの位にいる役者だけだっけきまり、知らなかったんです」

喜楽 「いや、知っとけよ！」

孫八 「苦笑いして) 適当な事言って、菊太郎さんの覚悟もわからねえで。そんなんでどのツラ下げて会いに行けやすか」

喜楽 「そうか」

孫八 「今までおいら、売れっ子絵師になる事しか考えてなかった。てめえの為の売れっ子絵師。けど、そうじゃねえ」

× × × × × × × ×  
(フラッシュユ)

イネが幸せそうに富士に手を合わせている。それを見て

微笑み会う与一とトミ。

× × × × × × × ×

孫八 「先ずはきっちり腕を磨かねえと申し訳がたたねえ。勝負は

これからでせよ」

喜楽「(笑みを浮かべて)へっ、孫八のくせに。よし、喜楽様が  
激励にひとつ、良いこと教えてやらあ」

孫八「良いこと？」

喜楽「この前版元さんところに行つた時小耳に挟んだんだがよ、今  
度清の国の『修羅道列伝』よみほんって読本を売り出すつもりらしい  
ぜ。あたるかどうかはわからねえが、この挿絵を描く絵師を  
探してゐてえなんだ」

孫八「なんで喜楽さんは名乗りを上げねえんです？」

喜楽『修羅道列伝』よみほんってのは軍記物だ。つまり必要なのは」

孫八「武者絵！」

喜楽「美人画の元絵で忙しいつてのもあるが、武者絵は得意な方  
じゃなくてよ。孫、版元さんに名乗りを上げたらどうだい」

孫八「(うつむきながら)でも、おいらなんか」

喜楽「勝負はこれからなんだろう？」

孫八、決意したように顔を上げ、懐から巾着を出す。

孫八「おやじ、勘定ここに置いとくぜ」

孫八、16文取りだし、置く。

孫八「喜楽さん、恩にきます」

喜楽「おう。しっかりやんな」

孫八、強い眼差しでうなずき、一目散に駆け出す。

○楽生の屋敷・楽生の部屋・中(夕)

楽生、絵を眺めている。孫八が勢いよく入ってくる。

孫八「師匠！」

楽生「なんだいつ、驚くじゃないか！」

孫八、滑り込んで楽生の前に正座する。

孫八「師匠、お願いがござえやす！」

○仙北屋吉兵衛の屋敷・広間・中（夕）

上座に仙北屋が座し、向かいに孫八が頭を下げて座っている。仙北屋は手紙を読んでいる。

孫八「お目通り、ありがとうございます」

仙北屋「樂生さんからの推薦状を持っているんだったら会わねえ

訳にいかないやな。しかし早耳だねえ」

孫八「へえ。版元さん、どうかこれを御覧くださいえ」

孫八、懐から、丸められた絵を取り出し広げる。それは見

事な武者絵の数々である。

仙北屋「ほう、これは」

孫八「おいらの武器でさあ。これで一世一代の勝負をしてみてえ」

仙北屋「おもしろい。やってみなさい。言っておくが負けはない

よ。評判が悪けりや（孫八の耳元で）おめえさんは終わりだ」

孫八「おいら、武者絵で負ける気しねえんでやすよ」

仙北屋「良い面構えだ」

○絵草紙屋・店先

読物『修羅道列伝』が平積みされている。次々に客がやってきてどんどん売れるていく。興奮気味の男2（28）が入ってくる。

男2「おやじ、『修羅道列伝』あるかい？」

店主「へえ、ここに」

男2「今、すげえ評判じゃねえか」

店主「おかげさまで。筋が良いのは元より、（本を開いて見せながら）この絵がまた良い。想像をワツとかき立ててくれやして、読んでるうちにてめえが戦ってるような気になっちゃう」

男2「（本に顔を近づけて）おおっ！」

店主「（本を閉じ）さ、続きは買ってからの楽しみですよ」

男2 「早く売ってくれ！」

○樂生の屋敷・広間・中（夜）

上座に樂生が座り、その隣に孫八、その隣に喜樂が座り、その向かいに弟子達が座っている。それぞれの前に酒が用意されている。

樂生 『修羅道列伝』の当たりにより、この孫八も喜樂に続きこの家を出て、独り立ちする事になった」

喜樂 「よっ！ 孫八師匠！」

孫八 「恥ずかしそうに）やめてくださいませよ」

喜樂 「良かったな、孫」

孫八 「それもこれも、師匠と喜樂さんのお陰でやす」

喜樂 「そういやそうだな」

樂生 「笑って）これこれ。（孫八に）お前の努力と強い意思が運を引き寄せ、実を結んだんだ。これに驕ること無く精進しな」

孫八 「へい！ （喜樂に）最近どうです？ 相変わらず忙しいでやすか」

喜樂 「孫のくせに嫌みかよ」

孫八 「へ？ どういう意味で？」

喜樂 「美人画も、ついでに役者絵も売り出せねえんだから暇に決まってるんだろ」

孫八 「え」

喜樂 「えっ、て、おめえなんで知らねえんだよ！」

孫八 「面目ねえです。ここんとこ読本の方にかかり切りになってやして。儉約令のせいですかい？」

喜樂 「ああ。今回ののは今までの中で一番質たちが悪いわり。ねえ師匠」

樂生 「前の將軍様は派手好きで贅沢三昧。好き放題やって子供は五十人ときたもんだ。そこんところに数年前の大飢饉。幕府

の財政は火の車なんだよ」

喜楽「今の老中は財政立て直しのために、俺らに儉約して慎ましく暮らせてよ」

孫八「贅沢したのは將軍様なのに、なんだっておいら達が儉約しなけりやならねえんです。だいたいおいら達、そんな贅沢な暮らししてやしたつけね」

樂生「贅沢つてのが、落語に芝居に富くじ、錦絵だとき」

喜楽「全くこのままじゃおまんまの食い上げだ。(酒をあおりながら) くそつ、描きてえなあ、良い女」

○長屋・井戸端(朝)

孫八が桶に水をくんで顔を洗っている。そこに桶を肩に担いだイネがやってくる。

孫八「おイネさん、早いですね。(イネをまじまじと見つめ)あの、毎日床に伏せてたつて嘘でしょう」

イネ「(笑つて) 孫八さんの富士のおかげだよ。しかし、売れっ子絵師がなんだつてこんな長屋に？」

孫八「売れっ子だなんて、『修羅道列伝』が売れただけなんで、まだまだでやす」

イネ「そうなのかい？」

孫八「それにおいら、この場所で大切な事を教えてもらいやした。その時の気持ちを忘れねえ為にも、住むならここかな、つてね。おイネさん達はおいらの恩人でやすよ」

与一の家の方から怒鳴り声が聞こえてくる。

孫八「なんだあ!!」

イネ、ため息をつく。井戸端から与一の家が見え、そこから与一が転げ出てくる。

孫八「与一さん、どうしたんでい!!」

孫八、与一の家に走って行く。

○同・与一の家・前（朝）

与一が地べたにうずくまっている。孫八が走って来て、与一を抱き起こす。

孫八「与一さん、何があつた？ うつ、酒くせえ」

トミの声「出て行け！ このバカ亭主！」

与一「あぶねえ！」

孫八「家の中を振り返って）え？」

孫八の額に、とんできた茶碗がモロにぶつかる。戸は勢いよく閉まる。孫八、額をおさえて道にうずくまる。

○同・孫八の家・中

大量の紙、絵筆、錦絵が部屋の端に寄せてある。空いた狭い空間で孫八と与一が向かい合い、窮屈そうに将棋をさしている。孫八はおでこに濡れ手ぬぐいをあてている。

与一「孫の字、すまねえな」

孫八「大丈夫です。でえじょうぶとこで与一さん、将棋がさしてえんだつたら、散らかってるおいらんちじゃなくて、外で長いす出してやりやせんか？」

与一「何言つてんだい孫の字。外で将棋さすのも禁止だろうがよ」

孫八「あ、そうか。（将棋をさす）今日仕事は休みでやすか？」

与一「ここんとこずつと物がへえつてこなくてよ、仕事にならねえんだ。お上の政策が裏目に出てるらしい」

孫八「そんな事になつてんですかい」

与一「その上、物の値段はうなぎ登り。これからどうなるかねえ。

（将棋をさす）それを紛らわす娯楽も取り上げられちゃ、酒でも呑むしかねえじゃねえか、なあ？」

孫八 「おトミさんが怒ってたのは（将棋をさす）」

与一 「仕事もしねえで酒ばっかりかっくらいやがって、だど。し

ねえんじやねえんだよ、できねえつつの」

孫八 「おトミさんにそう言わねえんですかい？」

与一 「おトミ、腹ん中にややこがいてよ。不安がらせるわけにい

かねえじやねえか」

孫八 「（ニヤニヤしながら）へえー」

与一 「（照れて）あんだよ。（将棋をさしながら）孫の字はいねえ

のかよ、心に決めた人とかよ」

孫八 「（将棋をさして）おいらは」

与一 「その顔は誰かいるんだな」

孫八 「（辛そうに）多分、嫌われやした」

与一 「じゃ、諦めんのかい」

孫八 「その人が幸せでいてくれたら、おいらはそれで、いい」

与一 「嫌えだつて言われたのかい」

孫八 「いえ」

与一 「俺あ言われたがなあ」

孫八 「え」

与一 「もう諦めようと思ったんだがよ、最後の一押しがきいて今

に至るつてわけでい」

孫八 「おトミさんと、ですかい」

与一 「どどのつまり、背中向けてうつむいてるだけじゃ、何も手

に入らねえぞ。そんな顔してるぐれえなら、とりあえずもう

いっぺん会いに行つてみたらどうでい。あ、王手」

孫八 「ええつ、もう!!!」

与一 「孫の字、おめえクソ弱えな」

孫八、盤に向かってうなだれている。

○道

深い編み笠を被った読売屋（28）が読売（瓦版）を売っている。そこに孫八が通りかかる。

読売屋「先の火災で焼失した芝居小屋は、町外れに移転。役者達の住むところも制限され、外出時は編笠着用が義務づけられた。役者との交際は禁止となり」

孫八、読売屋に取り付く。

孫八「なんだって!!」

読売屋「先が知りたきや読売買いな」

孫八「買う。買うけど、なんで役者がそんな目に遭ってんだい」  
読売屋「贅沢や風紀の乱れは役者のせい。恨むなら役者を恨めつてな。お上は不満の矛先を身分の低い役者に向けたい、そんなところだろうよ。（読売をさしだし） 4文」

孫八、4文払い、読売を見つめて愕然としている。

○大通り

孫八が歩いてきて、橋のたもとで立ち止まる。

孫八「（息を切らせて）芝居小屋はどっちだよ。しかし、ものすげえ町外れに追いやりやがったな」

橋の向こう、遙か遠くから編笠をかぶった菊太郎が歩いてくる。孫八は菊太郎だと気づかない。菊太郎が、ヤス（30）、ロク（26）にすれ違いざまぶつかられ、菊太郎は道に倒れ込む。

ヤス「おう、すまねえ…って、役者かよ。底辺の奴は俺様達をよけて歩くのが筋つてもんだらうが。なあロク？」

ロク「その通りですぜ」

ヤス、菊太郎をなめるように見つめる。

ヤス「ロク、女方ってのは日頃から襦袢も真っ赤な女モンで、腰

巻きも巻いてるらしいぞ」

ロク「ホントですかい？」

ヤス「ようし、近頃おもしれええ事もねえからよ、ちよつとこいで披露してもらおうじゃねえか」

ロク「そりゃいいや」

菊太郎、うつむいて歯を食いしばっている。

ヤス「早く脱げよ。それとも、脱がしてもらいてえのか？」

ヤス、菊太郎の襟首をつかむ。孫八が菊太郎とヤスの間に  
入る。

孫八「(苦笑い) 兄さん達、もうそれぐらいでいいじゃねえか」

ヤス「なんだてめえ」

孫八「(苦笑い) やめやしようよ、もう。見るに堪えねえんだよ」

ロク「あんだつて？ 聞こえねえよ」

孫八「(うつむいて) 弱<sup>よ</sup>え立場の人間いたぶつて憂さ晴らしかよ。  
(怒鳴る) 反吐が出らあ！」

ヤス「おもしれえとこなんだから邪魔すんじゃねえよ、このすつ

とこどつこいが！」

ヤス、孫八を殴り飛ばす。人が集まってくる。

ロク「いきがつてんじゃねえぞ三下」

ロクも加わる。菊太郎、スツと立ち上がる。

菊太郎「(大きな声で) さあてお立ち会い」

孫八、ヤス、ロク、手を止め、菊太郎に注目する。行き  
交う人々も足を止める。菊太郎、帯を解いて着物を脱ぎ  
捨てる。菊太郎は真つ赤な襦袢一枚になる。

菊太郎「女方の中岡菊太郎にございます」

孫八「き、菊太郎さん!!」

菊太郎「襦袢ももちろん女物。天下の往来で襦袢一丁になったんだ。せっかくなんでここので一節。中岡菊太郎が演じます、

遊女十六夜をとくとご覧あれ」

菊太郎、しなやかに動き、歌い、舞う。全員、菊太郎に釘付けである。急に菊太郎が動きを止める。

菊太郎「続きをご覧になりたい方は芝居小屋までお運びください。役者一同、皆様のお越しを心よりお待ち申し上げます」

菊太郎、地面に座り、深々とお辞儀する。「よ、日本」などの声援が巻き起こる。菊太郎、頭を上げてニツコリ微笑む。ヤス、ロク、バツが悪そうな顔をしている。

菊太郎「お兄さん達も是非見に来ておくんないね」

ヤス「(うつむきながら) お、おう」

ロク「俺つ、絶対観に行くからな！ な？」

菊太郎「(ニツコリと) へえ、おおきこ」

人々、その場を離れていく。菊太郎、孫八に駆け寄り。

菊太郎「すんまへん、うちのせい…孫さん」

戸惑う孫八は、土埃まみれで唇から流血している。

菊太郎「血、出てる。とにかく川原へ下りまひよ」

○川原

葦がぼうぼうに生えている。菊太郎が襦袢のまま孫八の頬を洗ったりしている。

孫八「菊太郎さん、もう大丈夫でさ。それよりその、着物を着ちやくれねえかい」

菊太郎「え？」

孫八「なんだか落ち着かねえから」

菊太郎「(微笑んで) 孫さんは孫さんのままなんやね」

菊太郎、そばに置いてある着物を持ち上げる。

菊太郎「あれ？ 無い」

孫八「どうしたんではない？」

菊太郎「うち、大事なお守り無くしてしもうたみたいで」

孫八「お守り袋かなんかですかい？」

菊太郎「いえ、紙なんやけど。どないしよ、うち、あれがないと」

菊太郎、駆け出す。

孫八「菊太郎さん、それって、これ、じゃねえですよね？」

孫八、畳まれた紙を差し出す。

菊太郎「それ、やわ。おおきに」

菊太郎、差し出された紙をぎこちなくつかむ。

菊太郎「孫さん、見た？」

孫八、紙ごと菊太郎を引き寄せ抱きしめる。

孫八「見やした」

菊太郎が持っている紙が風で広がる。それは孫八が描いた義経の武者絵である。

孫八「すいやせん、あの、嫌だったらそう言ってくだせえ」

菊太郎、孫八の背中を強く抱きしめる。

孫八「おいら、やっぱり菊太郎さ……」

菊太郎、孫八の胸から顔を離し、孫八に口づけする。孫八、菊太郎に押され葦に倒れ込む。

孫八「いつも言わせてくれねえんですね」

孫八、体を反転させ、菊太郎の上になり口づけする。

×

×

×

菊太郎、着物をきちんと着て髪の毛の乱れを直し、編笠を被って立ち上がろうとする。半纏がはだけた孫八が起き上がり、菊太郎の腕をつかむ。

孫八「今度いつ会える？」

菊太郎「次の公演が、終わったたら」

孫八「いつ終わるかは」

菊太郎「お客さんの入り次第です」

孫八「(残念そうに) そうか。じゃ、おいらも今抱えてる仕事を

片付けたら芝居、観に来やすよ」

菊太郎「(うなずいて) 孫さん」

孫八「ん？」

菊太郎、孫八の頬にふれる。

菊太郎「会えて良かった」

孫八、微笑んで、頬にふれている菊太郎の手に自分の手を重ねる。

菊太郎「うち、もう戻らんと」

孫八「芝居小屋まで一緒に行きやす。また何かあるかもしれねえ」

菊太郎、立ち上がるうとする孫八の肩をそつと押さえて首を振る。

菊太郎「うちら役者とおるとこ、人に見られたら咎められる」

孫八「構わねえ。それより菊太郎さんを無事に送りとどける事の

方が大事でさ」

菊太郎「(微笑んで) うちのわがまま、きいてくれはる？」

孫八「なんでい？」

菊太郎「うちを見送って欲しいんです。見えんようになるまで。

辛い事がいっぱいあったけど、孫さんが見ててくれたらまた前に進める気がするから。(手を合わせて) ね、この通り」

孫八「わかりやした」

菊太郎、挑むような表情で立ち上がり、孫八に背を向けて歩き出す。

孫八「菊太郎さん」

菊太郎、立ち止まって振り返る。

孫八「心底惚れてやすよ。今までも、これからも。(照れ笑いして) 言っつてやりやした」

菊太郎、泣いてるようにも笑ってるようにも見える。

菊太郎「孫さん、おおきに」

菊太郎、再び歩き出し、菊太郎の姿は見えなくなる。

○長屋・孫八の家・中

孫八、真剣な表情で引き札（チラシ）の元絵を描いている。

○摺師の作業場

摺師に孫八が色の指定をする。摺師が試し刷りをし、それを孫八に見せる。それを見た孫八、違う色の指示を出す。

○醤油問屋・前

若旦那が引き札を配っている。何人もの通行人が引き札を受け取り、引き札を凝視しながら歩いて行く。引き札片手に来店する者も。孫八がその様子を満足そうに眺め、若旦那とうなずき合う。孫八、青空を仰ぎ微笑む。

○芝居小屋・月山座・前（朝）

外観。登りがたくさん立ち、大勢の客達でごった返している。孫八がその中できよろきよろしていると、隣に立っていた、いとと目が合う。その奥にきぬ（20）がいる。

いと「あ、孫八！」

孫八「うえつ、おいと姉ちゃん」

孫八、逃げようとするが、人で身動きが取れない。

きぬ「え？ 孫八？」

孫八「（げっそりした顔で）おきぬ姉ちゃんまでいんのかい」

いと「あーあ、菊様に会えない代わりに、孫八なんか会っちゃまったわ。ついてない」

孫八「菊様？」

いと「あんた知らないの？ 菊様」

きぬ「中岡菊太郎。異例の早さで昇進してた、上方出身の役者よ」

孫八「え」

いと「並の女よりきれいなものよ。なめらかな肌に涼しげな目元。所作がまたはかなげで」

孫八、鼻血を吹き出す。

いと「あんたと大違い！（爆笑）あんた何、鼻血出してんの」

孫八、紅潮したまま慌てて袖口で鼻血を拭う。

きぬ「ああ、あのほっそりした腕かひなに抱かれてみたかったわーっ」  
いと「菊様——！」

孫八「咳込んで」で、その菊様とやらは今日出るんだよな？」

いと「何にも知らないのね。菊様は上方に戻ったのよ」

孫八「なんだって!!」

きぬ「今回の儉約令、役者が目の敵にされてるのは孫八でも知ってるでしょ」

いと「最近、当代一って言われてた人気役者が江戸所払いになっ  
たじゃない。それと一緒よ。人気急上昇中の菊様は、江戸か  
ら出て行って事。お上は芝居も衰退させたいのよね」

きぬ「せっかく人気出てきてたのに、かわいそうな菊様」

孫八、呆然と立ち尽くしている。

菊太郎の声「上方にはすごい女方がぎょうさんおって、うちや舞  
台に上げてもらえんかった。江戸は、うちを舞台に居させて  
くれるどこよりも良い町です」

太鼓が鳴り響く。

いと「あ、姉ちゃん。木戸が開いたよ。早く早く」

きぬといと、人の流れに乗って芝居小屋の方に吸い込まれ  
ていく。孫八は芝居小屋に背を向け、人の流れに逆らっ  
てゆっくり芝居小屋から離れていく。

○大通り

孫八が唇を噛み、うつむいて歩いている。ふと顔を上げると、前方に人ばかり。皆、土下座している。その奥に豪華な籠が通り、豪華な着物を身に纏った大奥の従者達が歩いている。孫八、大奥の行列を睨みつける。

×

×

×

(フラッシュ)

振り向いた菊太郎の泣いてるような笑ってるような顔

×

×

×

孫八、大きめの石ころを拾い上げる。

孫八「ちきしょう」

孫八、大奥の行列に向かって走り出す。行列めがけて石を振りかぶるが、走って来た喜樂がその腕をつかみ、孫八を物陰に引っ張り込む。

喜樂「何やってんだ！ 死にてえのか、このバカ！」

孫八「離しやがれ！」

喜樂、孫八の頬を殴る。

喜樂「おめえだけが死罪になるんだったら勝手にやりやいい。けどな、おめえの家族も樂生師匠も咎められるだろうが。おめ

えの軽率な行動で皆が迷惑被<sup>こうむ</sup>るんだよ！」

孫八、うつむく。

喜樂「大体この石投げてなんか変わんのか。ああ!!」

孫八「じゃ、どうすればいいんですか！」

喜樂「少なくとも、投石して死ぬ事が今やるべき事じゃねえだろ。頭冷やしてよく考えやがれ」

孫八、うめきながら地面を拳で何度も叩く。

○長屋・孫八の家・前(夕)

孫八が憔悴しきった顔で歩いてくる。トミが与一の家から出てくる。

トミ「あ、孫さん。おかえんなさい。ちょっと待ってて」

トミ、再び与一の家に戻ると、野菜の煮物を持ってくる。

トミ「煮物、作りすぎちまったから孫さんにお裾分け」

孫八、ぼんやりと煮物を受け取る。

トミ「額をさして」この前はごめんなさいね」

孫八、ぎこちなく首を振る。

トミ「またうちの人の話し相手になってやって。女の私じゃわからない事も多いから」

孫八「(小声で) おいらなんか」

トミ「孫さんがご近所に来てくれて良かった。おつかさんもうこの人もそう言ってたわ。あ、新しい錦絵も楽しみにしてるよ」

孫八、軽く頭を下げると、足早に孫八の家に入る。

○同・同・中(夕)

紙、筆、絵草紙、錦絵が所狭しと置かれている。苦しそうな表情の孫八が入ってきて、空いている空間に座る。手には煮物。孫八、煮物を手でつまみ、一口食べる。

孫八「うめえ」

孫八、器を口にあて、煮物を流し込む。食べながらむせび泣いている。食べ終わると、袖口で涙を拭う。目を開けた孫八は前を見据え、精悍な顔つきになり、文机に向かう。そして、紙と筆を取り一心不乱に絵を描き出す。

○仙北屋吉兵衛の屋敷・広間・中

仙北屋が上座に座り、向かいに孫八が座っている。仙北屋は眉間に皺を寄せながら何枚もの絵を見ている。

仙北屋「孫さん、これは」

孫八「ご依頼いただいた『修羅道列伝』錦絵版の元絵でやす」

仙北屋「確かに『修羅道列伝』の一場面のようなのだが」

孫八「美人画も役者絵も売ることができねえなら、今店に並べられるもので、お客さんに楽しんでもらいてえと思いやして」

仙北屋、じろりと孫八を睨む。

孫八「版元さんにはご迷惑おかけするかもしれやせんが、いかがでしょうか」

仙北屋「(笑い出す) おめえさんは面白い男だねえ。こういうのは嫌いじゃ無いよ。これを売り出したらどうなるか。面白い！ いや、実に面白いよ」

孫八「(不敵な面構えで) ありがとうございますござえやす」

○絵草紙屋・店先

客が何人も出入りしている。男1と男2が店先で立ち止まり、錦絵を手持って凝視している。錦絵は見えない。

男1「これが噂の錦絵か」

男2「(笑って) こりゃいいや。溜飲が下がるってもんだぜ」

男1「全くだ。でもよ、これを描いた奴も売り出した版元も怖いもん知らずだな」

男2「(笑って) 違えねえ」

○長屋・孫八の家・中

孫八が絵を描いている。戸が開き、『修羅道列伝』の錦絵を持った同心と岡つ引きが立っている。

同心「これはお前が描いたものか」

孫八「へい。おいらが描きやした」

同心「奉行所からの呼び出しである。神妙にいたせ」

孫八「わかりやした」

孫八、筆を止め、静かに立ち上がる。

○同・同・前

同心と、岡っ引きに縄をうたれた孫八が出てくる。イネ、トミ、与一が心配そうに出てきている。

与一「孫の字」

孫八「ちよいと行って来やす」

先頭を同心が歩き、孫八が岡っ引きに引かれて歩いていく。孫八は精悍な顔つきである。

○南町奉行所・中

おしらすに孫八が座っている。孫八より一段上に与力が控えている。公事場に遠山が座っていて、孫八に『修羅道列伝』の錦絵を突きつけている。絵は、画面右にたくさんのごちそうを食べ散らかして眠りこけている王。王の下には、王の寝床を支えたり、ごちそうの準備をしている農民。画面左から中央にかけて、たくさん妖怪を引き連れた若武者が5人、王を狙って刀に手をかけている。画面中央で、働け、とばかりに農民を鞭打つ役人。打たれて瀕死になった農民達が徐々に妖怪になっていつている図。

遠山「この錦絵は幕府を批判しているものであろう」

孫八「恐れながら、『修羅道列伝』の筋はこうでやす。昔々の清の国。政せいは腐敗し、お上は私服を肥いやしていた。農民達は貧困にあえぎ、怒れる民は立ち上がる。各地から猛者が集まり手を結び、ついには政権を倒す、というものでありやす。

清の国の軍記物をそのまま錦絵にしただけのこと。この錦絵

を見て幕府批判だと言われるのであれば、それはお奉行様も今の幕府がこの『修羅道列伝』の清国のように、良い政まつりごとをしてねえと思っている事になりやせんか」

遠山「町人の分際で口を慎め！ では聞くが、この王を討ち取るうとしておる武者。江戸所払いになった役者ではないのか？ 隈取りをしておるではないか。清国の者でありながら、なぜ隈取りをしておる」

孫八「隈取りは力強さの表れ。この武者の力強さを隈取りで表現いたしやした」

遠山「では、この奥の恨めしそうな妖怪。体に花を4つまとおる。ちまたでは、『花』が『4つ』、『はな・し』で、寄席を縮小したことの恨みだとか」

孫八「この花をよく見てくたせえ。彼岸花でやす。死人花しびとばなもいいやすでしょう。ですから妖怪の恐ろしさを出すために、

死人花を『4』本描きやした」

遠山「あくまでしらを切り、お上を愚弄する所存か」

孫八「そんな気、毛頭ごさいいやせん。今、江戸の町では、仕事は無え、物は高えってんで、皆不安な日々を過ごしておりやす。なのに、それを紛らわす娯楽も取り上げられちまつてる。せめて、今出せるものでなんとか楽しんでもらいてえ、そう思っつて描きやした。おいらは絵師だ。絵を描くことがたったひとつの武器なんでやす」

遠山「ほう、言ったな。ではその武器でわしを納得させよ」

孫八「え、どういう事でごさいしましょう？」

遠山「(大声で)筆と墨をごこへ！ 絵を描く事が唯一の武器なのであろう？ 申開きではなく、絵でわしを納得させよ」

孫八「え、あの…」

遠山「もしできなければ、お前を投獄し、『修羅道列伝』の版元、

仙北屋吉兵衛と、お前の師である華川楽生も裁きにかける」

孫八「そんな…」

おしらすの上に文机が用意され、その上に紙と筆が置かれる。遠山は孫八を睨みつける。孫八は文机に向かうが、絵筆を持つ手は震え、息遣いは荒い。孫八、目を閉じる。

菊太郎の声「誰にも負けへん武器を持つてゐるって事やもん。そんなお人は、絵師にならなあかんと思います」

目を開けた孫八は穏やかに微笑んでいる。

孫八「うなずいてへい」

孫八、ものすごい早さで筆を動かし、絵を描き上げる。

孫八「お奉行様、どうぞご覧くだせえ」

孫八、そばに控えている与力に絵を渡す。絵を受け取った

与力、感嘆の声をもらし、絵を見つめたまま固まる。

遠山「これ、はよう持って来ぬか」

与力「はっ、失礼つかまつりました」

与力、遠山に絵を渡す。それは微笑んでいる菊太郎である。

遠山「美人画？」

孫八「今売り出すことが禁じられているものでやす。いいもんでしよう」

孫八、与力を見つめる。与力、目を泳がせる。

孫八「なんでこれを禁じなけりやならねえんでしょうか。おいらバカだからよくわかんねえんでやす。おいらはただ、こんな風に皆に笑っていて欲しいだけでやすよ」

遠山、絵を自分の目線まで持ち上げる。すると、袖が肘まで下がって、入れ墨があらわになる。

遠山「おや、これは中岡菊太郎か？」

孫八、驚いて顔を上げる。遠山の入れ墨が目に入る。

×

×

×

(フラッシュユ)

袖をまくり上げ、入れ墨をちらつかせながら、孫八を蹴り飛ばしている遠山。

× × ×

孫八「あーっ、芝居小屋でおいらを蹴り飛ばしたやくざもの」

遠山「控えおろう」

孫八、遠山の声に驚いて深々と頭を下げるが、上目遣いで遠山の顔をうかがう。

遠山「芝居はわしの楽しみでな、何度も足を運ぶゆえ、そのうちの幾度かは大向で観ておる」

孫八「けど大向なぞ、町人が座るような席なのに」

遠山「昔放蕩して、商家で厄介になつてた時期があつてな。たまにあのような席で観たくなる。儉約にもなるしのう」

孫八「それで町人言葉も。でも、そんなに芝居がお好きなのにどうして芝居小屋を移転させたり、役者を目の敵に？」

遠山「この度の儉約令を役人が皆支持しておるわけでは無い。当初、芝居小屋は消滅させるはずだったが、わしが異議申し立てをして移転と相成つたのだ。しかし、申し入れを聞いていただくなら、こちらも引かねばならぬ事もある。そうでなければ、わしの立場が危うくなる」

孫八「お立場」

遠山「今の立場が無いと、物事を動かすことも止めることもできぬ。老中とて、皆を苦しめるために儉約令を出されたのではない。何とか財政を立て直そうと考えられてのことだ。それがうまく働いていないのは否めないがな」

孫八「皆、己の信じる道を進んでるんでやすね」

遠山「(不敵な笑みをたたえて) 進んでみやがれ若造。その先に何があるかはわからんがな」

孫八「深々と頭を下げ）ありがとうござえやす」

○長屋・孫八の家の前（夕）

与一、トミ、イネ、喜楽が一樣に不安そうな面持ちで集まっている。道の向こうから孫八が歩いてくる。

イネ「ちよいと！ あれ、孫八さんじゃないかい？」

与一「孫の字！」

皆一斉に孫八に駆け寄る。

喜楽「孫、おめえ大丈夫だったのか？」

孫八、笑顔でうなづく。

孫八「おいら、これからも絵を描きやすよ。描いて描いて、描きまくってやりやす」

トミ、イネ、安堵して泣き出す。喜楽、安堵した表情で「ばかやろう」とか言いながら孫八の首に腕を回して頭にげんこつを食らわせる。与一も歓喜の声を上げる。

T 三年後

○絵草紙屋・前

外観。たくさんの方が出入りしていて、桜の花びらが舞い散っている。客たちは、美人画、役者絵を手に満足そう。

○芝居小屋・月山座・立女形部屋・中

鏡の前に菊太郎（20）。隣には上機嫌な座元（45）。

座元「老中が失脚して儉約令も消滅。これから俺達の時代が戻ってくる。気合いを入れて盛り返していくよ」

菊太郎「この度はお声かけいただき、ありがとうございます」

座元「上方で名を上げている菊太郎が出てくれたら連日大入り間違いない。実のところ、お前を呼び戻す事ができたのはお

奉行様の口添えもあつたからなんだがね」

菊太郎「お奉行様？」

座元「ご最賃なようだ。お前の絵を持っておられるらしい」

菊太郎「はて、江戸では描いてもらつてないはずですけど」

座元「そうか？ とにかく今回は錦絵にも力を入れて大々的に売り出すからな。絵師も江戸一番の絵師に頼んだ。もうすぐ挨拶に来る」

菊太郎「なんという絵師ですか」

座元「華川楽生。押しも押されもせぬ、売れっ子絵師だ」

菊太郎「(非常に驚いて)は、華川楽生!？」

座元「最賃なのかい？」

菊太郎「いえ、その、楽生師匠のお弟子さんについて聞きとうて奥役の声「華川楽生師匠、お見えになりやした」

座元「私は他にやらなきゃならない事があるから、またあとで」

菊太郎「(頭を下げて)へえ。どうぞよろしゅうおたの申します」

座元、部屋を出て行く。

奥役の声「楽生師匠、こちらでございます」

菊太郎、入り口に向かって頭を下げている。

菊太郎「中岡菊太郎にございます。この度はよろしゅうおたの申します。あの、いきなり不躰で申し訳ないんですが、師匠のお弟子さんで孫八さんという方がいらつしやると思ふんです。その方、今どうしてはるか…」

菊太郎、顔を上げる。驚いた表情で止まるが、次第に顔がほころび、大粒の涙が目からこぼれ落ちる。菊太郎の前には孫八(22)が座っている。

孫八「二代目、華川楽生にございやす。どうぞよろしくおねげえいたしやす」

優しく穏やかな笑顔の孫八。

(終わり)